人間関係教育の教育目標に関する社会学的考察
—信頼という視点から—

赤 堀 方 哉

【1．序論】

1997年に神戸で起きた連続児童殺傷事件以降、少年たちの犯罪が大きな社会問題となっている。一方で、少年法の改正による厳罰化が議論され、その一方でこうした少年たちを精神障害として扱うことによって「例外化」しようとしている。この「例外化」という切断操作は、少年犯罪者たちを特異な者、非日常的な者として、日常の世界から排除する営みであり、この営みによって日常生活の安定性を守ろうとしているにすぎない[注1)]。少年犯罪の深層を探ったルポ（読売新聞、2000）は、この「例外化」という操作の恣意性を描き出している。「時に加害者となり、時に被害者となる」いじめの構造、「こころの静まることのない」家庭、「認められたい。しかし、現実には、だれも評価してくれない」という思い、「生身の人間と接する機会の少なさ」が引き起こす対人ストレス、そして、これらに起因するとされる「対人関係を築く」能力の不足、「人間関係に傷つき挫折した」経験、「手近な仲間との関係が断ち切れることへの不安」、「人に対する信頼」の喪失。犯罪を犯した少年たちの思いには何一つ特異な思いはない。それらは現代社会に生きる若者一人一人の思いと共通する思いである[注2)]。

人間関係に傷つき、悩み、人間関係から疎外されていく若者の空虚感。これは人間関係の中でしか、癒されていくことはないであろう。拙著において、人間関係教育におけるコミュニケーションは「他者を通じて、自己を知り、自我を形成する過程」を捉えられるべきであると述べた（赤堀、2000）。この文脈で再度述べるならば、コミュニケーションは「空虚さを埋めていく過

程」として捉えることができるであろう。この空虚は人間に対する信頼によって、埋められるものである。

本研究の目的は、人間関係教育の教育目標を呈示することである。その目的を果たすために、従来の信頼の構造と、それが現代日本において崩壊している様子を示す。その後、スポーツ社会学等の知見によりながら、新たな信頼の構造を示す。この新たな信頼の獲得が、人間関係教育の教育目標として提起されるのである。

【2．コミュニケーション不全】

大平（1995）は、現代の若者のやさしさを「予防としての“やさしさ”」として描き出した。そこでは、“やさしさ”は相手を傷つけまいとする予防であり、それ以上に自分が傷つかないための予防である。この予防線を張って始めて、人間関係を結ぶことができるのである。彼らにとって、「コトバはお互いを傷つける危うい道具」（大平、1995）である。彼らは人間関係に、互いの気持ちに立ち入らぬよう細心の注意を払う。「自分の言葉が他人を傷つけるのではないか」という思いは、会話から当事者を疎外する。そのとき交わされる言葉は当事者とは無関係な空疎な内容しか持つことはない。自分の言葉が、他者へとつながっていくことを信頼できないのだ。これは「私」という「物語」への不信感に他ならない。

他人を傷つける以上に、自分が傷つくことを忌避する。彼らにとって傷つくとは、多くの場合、自分の胸の内を外部の尺度で計られることに起因する。傘を無断で「借りた」者が、その行為を窃盗であると指摘されると傷つくのだ。例えば、彼らにとっては、「借りた」という自分の「物語」に固執し外部の「物語」を受け入れられない。これは他者が自分の内面へとつながってくることの拒絶であり、「私」の外部にある「物語」への不信感である。

つまり、今日のコミュニケーション不全の大きな要因の一つは、自他の「物語」への信頼感の喪失である。その信頼が喪失したが故に、つながりが拒絶されているのである。

【3．信頼の構造とその崩壊】

現代社会において、信頼は危機に瀕している。政治家と民衆の間の信頼関係から始まり、教師と学生や生徒、親と子、そして友人関係においてまで信

頼関係は危機に瀕している。もちろん、個々の人間関係においては信頼を有している場合もあるだろうが、社会一般的な事象としては信頼関係が揺らいでいることには異論はないであろう。

そもそも社会の信頼関係は、基本的に２つの焦点を持つとされる（佐伯、1997)。一つは共通の権威であり、他方は共有された過去である。共通の権威とは政治的な権威であったり、宗教的な権威であったり、またこれ以外の何らかの権威である場合もある。これは、個人の存在や力を超えたところに、共通のより大きな力や、より重要な価値を認めることによって成立する信頼関係である。人と人とを媒介するものとしての共通の権威を認めることによって信頼関係は成立する。この存在を認めなければ、個々がバラバラに自分の利益と権益のみの追求に終始し、その結果として「万人の万人に対する闘争」と表現された状態に陥るであろう。

一方、共有された過去とは、微視的には各個体のもつ経験であり、巨視的には集合体の歴史としてその成員が分有するものである。共通の経験や共通の歴史が、他者に対する「共感」の感情を生みだすのだ。信頼している人を思い出してみよ。彼（彼女）は共有した濃密な時間と共に思い出されるはずである。そもそも信頼というものは、多かれ少なかれこの「共感」というエモーショナルなものを含んだ紐帯の感情が背景にあるのである。

信頼の２つの焦点である共通の権威と共通の過去は、前者は同時代的であり、後者は歴史的である。この２つの焦点は、時には同一のものとなりうるが、原理的は別のものと考えられる。信頼は、この一方もしくは両者に支えられて成立していたのである。

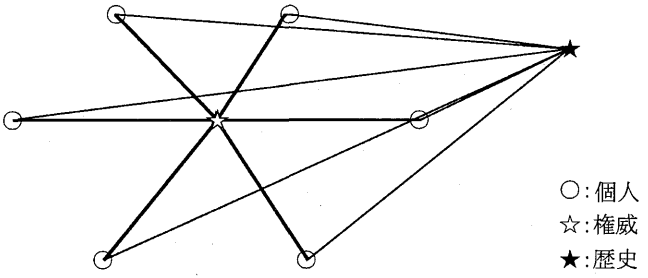

図 1.従来の信頼の構造

しかし、日本の戦後はこの信頼の焦点を喪失させた。信頼の焦点の喪失に中心的な役割を果たしたのが、「戦後民主主義」と言われる日本独自の民主主義の受容過程である。まず、東京裁判によって第2次世界大戦は侵略戦争であると規定され、日本をその戦争に導いたのは天皇制を中心とする戦前のファシズム体制であると規定された。そのため、戦後の日本を民主的な国家とするためには、戦前との断絶が不可欠なものとされたのである。そして戦前との断絶を確かなものとするために、書籍から新聞、教科書に至るまで、戦前の日本を「悪者」として描き出していったのである（井沢、2000　藤岡、1997)。このような風潮の下では、戦前の日本を始めとする日本の歴史を肯定的に扱うことはタブーとされたのである。その結果、日本人（特に戦後生まれの若者）は日本という歴史を分有することができなかった。

国家を語ることが戦前のファシズムを肯定することと同一視されたため、国家を語ることがタブーとなった社会が、民主主義や自由を受容するときにどのようなものになるのかは想像に難くない。「個人の権利」に対して「国家の権利」を認めないならば、ほとんど無条件の個人の自由が認められることになる（佐伯、1996)。主体としての個人の自己完結性、絶対性を戦後民主主義は保証したのである。個人の絶対性から出発するならば、個人を超えた権威を認められるはずもないのは当然の帰結である。

戦後民主主義は個人の利益や権利を超えた共通の権威を認めようとしないのであり、上記のように過去と断絶すべき事を説くのである。戦後民主主義者は、様々な権威に対する信頼を掘り崩し、戦前の日本をファシズムと規定することによって日本人の集団的な経験のベースを破壊した。このように共通の権威と経験を失った結果、人間の相互信頼が希薄になったのである。

さらに、高度消費社会の到来は戦後民主主義の普及との相乗効果により、信頼の基盤を掘り崩していった。高度消費社会が発するメッセージ――「ありのままのあなたが一番」、「あなたらしく」――は、早くから消費主体としての自立を促す。そのエゴ衝動のままに膨張した自己は、自己の存立根拠を自己の内に求めるしかない。赤堀（2000）で示したように、自己の存立根拠を自己の内に求める者は、コミュニケーションの不可能性を予感し、その前で立ち止まるしかないのである。ここにはもはや信頼などありえず、無限の社会の中をただよう「孤」としての個があるだけがある。

【4．新たな信頼の焦点】

前節で示したのは、信頼関係を支えた焦点の喪失である。上述したことを換言するならば、人と人は大きな物語を介して、互いにつながっていたと言える。人間は物語なしで生を全うすることができない、いや、人生そのものが物語なのである。我々が生きているこの世界は、「現実」だけで構成されているのではなく、我々は解釈された「現実」を生きているにすぎない。この「虚構」を含む「現実」の中で、日常生活を送ることができるのは「虚構」が信頼できるからに他ならない。信頼できる「大きな物語」が喪失した今、個々がそれぞれの「小さな物語」の中に自閉して生きているのだ。失われた信頼の基盤を今さら回復することは不可能であろう。今、問われていることは、新たな信頼の基盤を模索することである。その可能性の一つとして、ここでは「小さな物語」同士をつなぐ方策として、「共同性」と「超個体性」を提起する。これは、スポーツを行っている最中に神秘的な感覚を味わう際の、身体の変容に注目して亀山佳明（1998）が身体論の文脈で述べたものであるが、身体だけにとどまるものではないと考える。

1．共同性

共同性の身体とは、チーム内あるいは競技者間の「間合い」に働く身体であり、ゲームを成立させるのに必要な他者との関係において成立するものであるとされる。野球の連係プレーでその例を示すならば、セカンドがゴロをさばいて、二塁に入ったショートにトスし、すかさずショートが一塁に送球してダブルプレーが成立するとき、セカンド、ショート、ファーストの各選手は互いに相手の動作を自己の身体の内に潜在的に作り出し、それにあうように自らのプレーを顕在化させる。このなぞり合いとかみ合いの微妙なリズムと間合いが、プレーの成功、不成功をわける。この間合いは練習を重ねるごとに緊密さと微妙さを加え、チーム全体、いやゲームの参加者全体が「一つの集団的実存的な性格」を持つかのように思われるのである。

2．超個体性

超個体性の身体とは、その身体と周りが融合して一体となり、当の本人を超えた全体そのものとなってしまうような身体である。例えば、ロッククライミングはもっとも集中力を必要とするスポーツであるため、クライマーは無我夢中で登はんしている折りには、岩の中に自分

が溶け込んで岩と一体化すると証言している。このように我々は身体の運動を通して、その対象物あるいは相手と、さらにそこに存在するすべてと一体化し、融合するという経験を持つことができるのである。

このような身体論の知見を人間関係の学びの中にどのように生かすことができるのであろうか。まず、共同性である。共通の権威は必然的に聖性を帯びる[注3)]。従って、共通の権威の否定は「聖なるもの」の存在の否定でもある。「聖なるもの」は自己の存在を否定するものである[注4)]。この自己の存在の否定を許容できない現代人は、「聖なるもの」の存在を認められないのである。この現代人の心性に適合する方向にしか、新たな信頼の焦点を求めることはできない。したがって、自己の肯定に信頼の柱を求められなくてはならない。隣人を徹底的に肯定すること、自己と異なる存在としての他者の肯定と同様の理由によって他者によって自己が肯定されること、これらに信頼の軸を求めなくてはならないのだ。ここに成立する信頼は、共通の権威を認めたときの信頼とは異質のものである。共通の権威を認めたときの信頼は、自己を否定することによって求心的であるが、自他を肯定することによって得られる信頼は遠心的であると言える。

他者を肯定し差異を積極的に許容する心性 —— デュルケーム（1893）は人格崇拝と呼んだ —— は分業から生まれるはずであった。彼によると、社会の発展に伴う社会の量と密度の増大は、生存競争を激化させ、結果的に分業を促進するとされた。そして、分業は諸個人が互いに独立であることを要請する。分業の発展は、ますます仕事を専門分化させ、諸個人は多様化していく。その結果、人間であるということ以外、共通点を持たない諸個人が、個人であるということを尊重する人格崇拝が成立し、諸個人間の有機的連帯が成立するはずであった。しかし、現実には分業化は進んだものの、有機的に連帯しているとは言い難い状況である。これは分業そのものを聖化する合理的支配（Weber、1956）が登場したことによるものと考えられる。結果として分業は、人格崇拝を否定し、有機的な連帯を生み出さなかったのだ。ここに、上述のスポーツとのアナロジーの限界が伺える。つまり、既存のプレーの一部分となったときには、いかにその分業が完璧なものであり、その瞬間に集団的実存を感じたとしても、これは我々の心性とは反するものであるが故に、スポーツという特定の場面を超えて敷延化することがない。今求めら得ているのは、分業そのものを作り出していく作業である。

共同性を実現することは、ミード（1936）の言葉を借りるならば「一般化された他者」の獲得ということになるであろう。「一般化された他者」の獲得は、「特定の他者」の役割取得から始まる。ミードはこの過程を「遊び」から「プレイ」へと進むプログラムとして考える。つまり、ごっこ遊び等を通じて特定の他者や目の前の具体的な他者の役割を取得するのである。この取得した「特定の他者」の役割がある量に達したとき、質的な変化が生じる。それは、具体的で特定的な他者を離れ、集団として、組織としての「一般化された他者」へと至るのである。このとき、個は集団の中の一員でありながら集団そのものとして存在しうる。

つまり、共同性の獲得のためには、目の前の具体的な他者の獲得が不可欠である。そして、具体的な他者の獲得から、分業の生成を経て、集団化に向かうその過程の中に、具体的な他者への信頼から人間そのものへの信頼、「人間はみんな違うんだ。違うからつながれるのだ」、が生じるのである。

次に超個体性について考える。自己を自己たらしてめているのは、他のものではない「私」として自他の認知が可能であるのは、物理的には身体という境界の存在によってである。この境界によって環境から隔離されるとともに、他者からも隔離される。また、この境界が存在するがゆえに、その境界の外の世界と自己を同一視することができず、他者の存在が可能になるのである。感覚器官が未熟な新生児には現実と非現実、自己と対象の区別は存在しない。そのため、自己はどこまでも広がっていき、この世界を覆いつくしているのであろう。感覚器官の発達は、全世界に広がる神の原型としての自己が否定され、限定されていく過程であると捉えることができる。

スポーツとのアナロジーで考えられた超個体性とは、自然と融合する身体であった。身体はより大きな存在である自然の中に融けだし、個は消失する。いや、個としての差異が消失すると言った方がいいだろう。残るのは差異の消失を促した大自然と差異をなくした匿名の自己だけである。ここに至っては大自然は我々の共通の原体験となりうる。大自然に対比される小さな自己、これは同時に大自然との境界の消滅は全世界を覆う大きな自己でもある。無限小でありながら無限大、この体験の共有は時代を超えて人と人とを結びうるのである。ちょうど共通の歴史をもつことが民族をつくりあげたように。

このような超個体性はスポーツだけに限られることではない。竹内敏晴（1975、1990、1999）は、話しかけるとは、「いきなりほかの世界はまったく

消え去り、ただ相手の人ばかりが目の前にあって、それが、それにからだ全体でとびかかってゆく」ことであり、話すとは言葉＝声が相手の体に触れ「脳にしみ」「腑に落ちる」ことであるとする。そして、相手のからだの内に入って、相手のからだと心を動かし、変えることであると言う。これは自他の境界が消失する体験であり、「『他』が私を満たす」体験である。そしてここでは、言葉が単なるコミュニケーションの手段ではなく、相手の体と融合するところに、言葉による体の解放を追求するのである。

これはまたからだ＝肉体を計測可能な客観的世界の存在＝客体としてのみ扱う古典自然科学的方法を超えて、「主体」としての、心＝からだ一元の「内から」捉え方であるとされる。ここにおいて「からだ」は、意識に指揮使役される肉体を超えて、世界内存在として自己そのもの、一個の人間全体となるのである。このとき意識は、からだ全体の働きの一部にすぎない。からだが動き出すとき、無意識がからだを領していく。無意識に導かれながら、意識はますます明晰になっていくのだ。このとき、近代的自己は解体するのである。すべての存在者、すべての生命は本来一つにつながっているということの実感。ここから人間存在そのものへの信頼、「人間はみんな同じなんだ。同じだからつながれるのだ」、が生ずる。

【5．人間関係教育の教育目標】

従来の信頼の焦点が喪失した現代社会において、人間関係教育の目標は、上記の2つの新たな信頼の焦点を作り出すことにある。2節で述べたように、我々は信頼なくしては人とつながることすら困難である。この困難さの前で立ち止まり、無限の宇宙の中を「孤」としてさまようしかなくなるのだ。このさまよう「孤」をつなぎとめ、「個」とするのが信頼なのである。つまり、人間関係教育では信頼の焦点を作り出すことを通して、人と人とがつながれる心性を再構築することになるのである。そして、その信頼は人間という存在への信頼となり、人と関わっていく勇気を我々に与える。

この2つの信頼の焦点を両者を並行して作り出すことは、矛盾した営みとなる。何故ならば、この信頼の焦点は、「人間は皆、同じである」、「人間は皆、異なる」という相反する命題を中心に据えているからである。この矛盾する2つの命題を人々の中で統合していくことが必要である。この矛盾の統合のためには、知的理解は無力であろう。知的に迫るならば、2つの命題の

2者択一を迫られることになるか、この矛盾の前で立ち尽くすしかない。それ故に、人間関係教育の場においては、体験が重視される。「人間は皆、同じである」、「人間は皆、異なる」という体験のそれぞれを積み重ねることによって、そしてその体験を受け入れることによって、人々の中で両者が統合されていくのを待つのである。

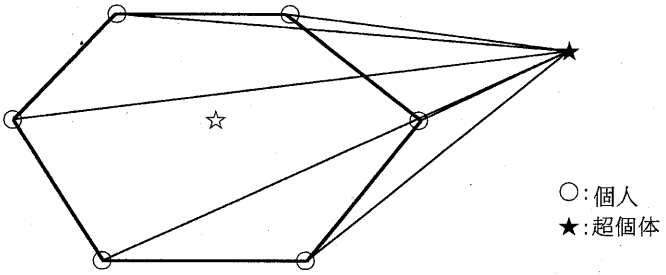

図 2.構築すべき信頼の構造

【6．結び】

本研究の目的は、人間関係教育の教育目標を呈示することであった。現代社会の、特に現代社会を生きる若者の、コミュニケーション不全を信頼の崩壊という視点から考察し、新たに信頼を作り出す焦点として、「共同性」と「超個体性」を挙げ、検討してきた。その結果、人間関係教育の教育目標とは、「共同性」と「超個体性」の核となる「人間は皆、同じである」という体験と、「人間は皆、異なる」という体験を提供することであり、これらの相反する命題が統合されることを促すことであるということが示された。

生きる「意味」を追求できずに「濃度」に生きるしかない「終わりなき日常」の中で、「まったり」と生きなければならない（宮台、1998）と言われるこの現代日本という社会においては、果たして意味を追求することが無意味なのであろうか。人間は意味のない人生を濃度だけを頼りに生きていくことができるのであろうか。おそらく不可能であろう。これは、人類の歴史が証明している。意味を持たずには生きていけないが故に、人類は宗教を生み出し、歴史を語るのである。現代日本において意味を追求できないのは、追求するその意味が「私」の意味であって、「私たち」の意味ではないからではなかろうか。今、求められているのは「私たち」の意味であって、その前

提となる「私たち」を集団的実存として感じることができる心性なのである。

本研究においては、人間関係教育の教育目標を示したに止まった。その方法論としては、体験を中心におくことを示唆したにすぎない。今後、人間関係教育における方法論を開発することを課題として、本研究を締めくくる。

【注】

1）神戸の連続幼児殺傷事件の犯人は、「行為障害」と診断することによって、医療少年院へと送致されている。それによって、社会は少年が病気だからそのような行為をなしたと考え、安心する。しかし、「行為障害」という用語は記述用語であって、「行為障害だから○○した」と言うことはできず、「○○したということは行為障害だ」と言えるにすぎない。つまり、異常行動の原因に関しては全く説明されていないにも関わらず、命名されただけで安心しているというのが現状である。

2）少年犯罪者が捕まり、彼らの思いが報道されるたびに、彼らの思いに共感する若者からの投書が新聞社や報道機関に殺到する。「神戸の連続幼児殺傷事件の犯人である酒鬼薔薇聖斗に共感できるか」、というアンケートに対して半数程度が共感していると回答している（宮台、1997）。また、佐伯（1998）も少なからぬ数の子どもが、この少年に心理的な共鳴を覚えており、この事件を理解可能なものと見ている、としている。

3）共通の権威から発せられる命令は、必ずメタレベルでの命令を伴う。例えば、「人を殺してはならない」という命令に対して、「命令を守らなくてはならない」というメタ命令が存在する。このメタ命令を受入れられているかどうかが、命令の有効性を決定する。そして、このメタ命令を受入れさせるのが聖性である。

4）神の至高性を厳格に支持しようとする禁欲的プロテスタントが徹底的な自己否定にたどり着いたことは有名である（Weber、1921）

【7．引用・参考文献】

- 赤堀方哉（2000）、「人間コミュニケーション教育におけるコミュニケーションの捉え方に関する一考察」、梅光女学院大学紀要『論集』33、29-40.
- Emile Durkheim（1893）、“De la division du travail social”, Fekix Alcan: Paris（『社会分業論』（上）（下）、井伊玄太郎訳、講談社、1989）

- 井沢元彦（2000)、『逆説のニッポン歴史観』、小学館.
- 亀山佳明（1998)、「スポーツと日常生活にみる滑走感覚」、井上俊編『新版 現代文化を学ぶ人のために』、pp254-277、世界思想社.
- Mead, G. H.(1936)、"Mind, Self and Society from the Standpoint of a Social Behaviorist" , University of Chicago Press（『精神・自我・社会』、稲葉三千男・滝沢正樹・中野収訳、青木書店、1973).
- 宮台真司（1997)、『透明な存在の不透明な悪意』、春秋社.
- 宮台真司（1998)、『終わりなき日常を生きろ』、ちくま文庫.
- 大平　健（1995)、『やさしさの精神病理』、岩波新書.
- 佐伯啓思（1996)、『現代日本のリベラリズム』、講談社.
- 佐伯啓思（1997)、『現代民主主義の病理』、pp166-176、日本放送協会出版.
- 佐伯啓思（1998)、『現代日本のイデオロギー』、講談社.
- 竹内敏晴（1975)、『ことばが劈かれるとき』、思想の科学社.
- 竹内敏晴（1990)、『からだと「ことば」のレッスン』、講談社.
- 竹内敏晴（1999)、『癒える力』、晶文社.
- Weber, M.（1921)、"Die protestantische Ethik und der Geist des K apitalismus" , in Gesammelte Aufsatze zur Religionssoziologe, Bd. Ⅰ(『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』、大塚久雄訳、岩波文庫、1989).
- Weber, M.（1956)、"Wirtschaft und Gesellschaft : Grundriss der verstehenden soziologie" vierte, neu herausgegebene Auflage, von Johannes Winckelmann, erster Teil, Kapital Ⅲ Ⅳ（『支配の諸類型』、世良晃志郎訳、創文社、1970).
- 読売新聞（2000)、「続 見えない心1～5」、6／6～6／10朝刊.